

## 巻頭言

北海道大学名誉教授 波岡茂郎

かつて私は、ある誌上に、バブル期からバブルがはじけてデフレに至った経過は「国営のネズミ講」であったと書いたことがあります。未だに胴元は名乗りをあげず、沈黙の構えです。そこへ円高のダブルパンチとボディブロー。ここへきて政治家・官僚から一般大衆までが、この度の不景気は質の異なる唯ごとではないものと気付いてきました。かつてのニクソンショックやオイルショックの時の不景気と明らかに何かが違うのです。つまり、政治家も官も企業も頭を180度切り変えないとこれを克服できないことがわかってきました。従来型の不景気対策、すなわち補正予算を組んで土木事業をやるというのではこの不景気は脱しきれないのです。ここで、いわゆるベンチャー・ビジネスとそれを支援する官の規制緩和こそが要求されているのです。政治家も今までの官の規制に守られて利益をむさぼっていた業種に群がる族議員から足を洗って行政改革に本腰を入れなければなりません。この見地からすると、少々荒っぽい発想ですが、小泉元郵政大臣が叫んでいる郵便局・郵貯・簡易保険の民営化のような発想の転換は、痛みを伴いますが避けて通れない事例を示しています。そしてつけ加えるならば、公共料金というものを見直し、ここにもメスを入れなければならないでしょう。ひるがえって、このような発想を畜産産業界でみると、発生もないのに豚コレラワクチンの接種を法律で定めることも、もうそろそろ見直さなければなりません。同じようなことが犬の狂犬病ワクチンにもあてはまります。

このような状況で畜産目的のSPF豚をみる時、

まさに現在わが国が要求されている構造転換を先取りしていたといえましょう。すなわち、民間主導型の新しい発想でかつ畜産物の輸入自由化に対抗できる1事例といえます。現在ではすでにこの試みが民間企業のみならず、県や全農、ホクレンも含む経済連で進められていることは頼もしい限りです。現在高度技術立国しか日本経済の将来はないという点では国民的合意ができています。SPF豚産業で重要な点は、GP農場で生産された稼働種豚を受け取って肥育豚生産する養豚家も同等に高い技術を身につけなければならないことです。同じGP農場から種豚が供給されても各養豚家間でかなり生産成績に幅がみられますが、この差をどうやって克服してゆくかが重要課題です。

デンマークでは畜産目的のSPF豚生産開始はわが国での試みより10年遅れの昭和52年にスタートしましたが、現在では全飼養頭数の60%がSPF化されており、周知のようにデンマークは養豚立国で養豚家のレベルも高く、SPF化へもほとんど抵抗なく順応し得る下地があったといえましょう。わが国ではピラミッドの頂点で技術改革が完了していても、それを普遍化する受け皿の改革に時間がかかっているのが現状です。

コマーシャルSPF養豚場では、マニュアルに従って繁殖成績や肥育成績を少しでも向上させることが必要で、日常業務から何を手抜きしようかなどと考えるのは論外です。毎年5～6月頃にSPF豚研究会が行われ、そこではいろいろなSPF豚農場からの成績が発表されていますので、ここに参加し大いに勉強しようではありませんか。